

自社ブランドの確立で オリジナリティあふれた事業を展開

事業内容

暦書、易学、気学書の企画、執筆、編集、暦書出版物の著作権の管理、運用。易学、気学の講師養成および講師の派遣事業。カルチャー教室の経営。各種式典、パーティー、健康スポーツなどに関するイベントの企画運営。占いブティック「ティカル」主催など。

特許登録番号と内容

商標登録第 2442600 号	象英/ショウエイ
-----------------	----------

(2011 年 6 月現在)



代表取締役社長 井上象英さん

独自の世界を確立し
知的財産を守るために名前を登録

株式会社象英企画は、暦書や易学、気学書等の制作から大学やカルチャーセンター、各種イベント等での講演や鑑定など、幅広く活動を展開し、多くの生徒や熱心なファンを持つ。

井上象英代表取締役社長は、日本でもっとも歴史ある暦といわれる『神宮館高島暦』や『象英暦』などの著者であり、日本を代表する鑑定師。また応用心理カウンセラーでもあり、よりよい選択ができるように手助けする“観象学”という新たな占術を生み出した業績でも知られている。

自分の思考や感性、自らが取材して得た情報等を文章などに落とし込んでいく象英社長と同社にとって、扱うものはすべて知的財産といえるだろう。保有している代表的な知的財産権は、“象英”という名前の商標。取得したのは、30年以上前だという。

「私は暦や易を学問としてとらえ、勉強してきました。そして昔から、この業界で今まで類を見ない世界を作りたいと思っています。そのために名前を登録してブランド化し、他の方の著述や鑑定との差別化を目指しました」と象英社長は、熱い思いを話す。

高い授業料を払って学んだことが
自社を成長させる基盤に

また社員も、暦や書籍、講演等に使用する原稿や写真、絵もすべて会社の財産という共通認識を持ち、運用・管理に尽力している。同社が知的財産に高い関心と知識を持っているのは、象英社長が会社設立の何年も前から、身近な人たちに米国の知的財産に関する考え方や管理等について学ぶ機会に恵まれていたことも関連があるだろう。当時、日本より進んでいた米国の知財事情は、象英社長が知財への関心を高め、専門的に学ぶ動機になったという。こうした背景もあり、同社では原稿を全て自分の考えや知識を基に書き、他者が手掛けた参考資料を使っていない。

「参考文献が一切ない本というのも珍しいかもしれませんね」と象英社長。ほかの出版物と内容が被る部分がないか確認することもあるという。こうして自社と他社の知的財産を尊重する姿勢は、社員にも大きな影響を与え、日常的に知財を扱う姿勢を学ぶ機会になっている。

しかし残念ながら、その大切な知財を侵害されたことも今までに何度もあった。たとえばある講演会では、複数年にわたり『象英暦』の文章を無許可で使っていた。



『幸せになりたいあなたに贈る 気学で知る運勢 神宮館 象英暦』の表紙のイラストは、毎回意匠登録を行う。ただ毎年発行するものなので、権利を守るのは1年限定。更新はしていない。

「たまたま象英暦の読者が講演会に出席していて、教えていただきました」と象英社長は話す。そこで先方に連絡すると“心当たりはない”という返事。事を荒立てたくないと思ったものの、放っておけないので弁護士に相談し、話し合いをした。その結果、先方は著作権侵害を認め、謝罪した。トラブルの原因は、先方の知財への認識不足にあったようだ。このほかにも同社の著作をまねて冊子を作ったケースもあった。

また以前、大手企業から古いゲームのアイデアが欲しいと依頼されたことがあった。そこで社内でチームを立ち上げ、何種類も提案した。しかし返事が来ない。何度も問い合わせるとやっと“採用されなかった”との答え。象英社長は「あれだけ労力も時間もコストもかけたのに残念でした。ところが半年後には、私たちが提案したコンテンツが製品になっていたんです」。驚き、怒りを覚えたが、大企業相手に戦っても結果は見えており、辛い思いをした。

大きな痛手だが、同時に得るものもあった。「提案前に特許申請したり、契約書に記載するなどして権利の所在を明確にしておかないと、自社の知的財産を守れないと学びました。そして何より“他ではまねできない

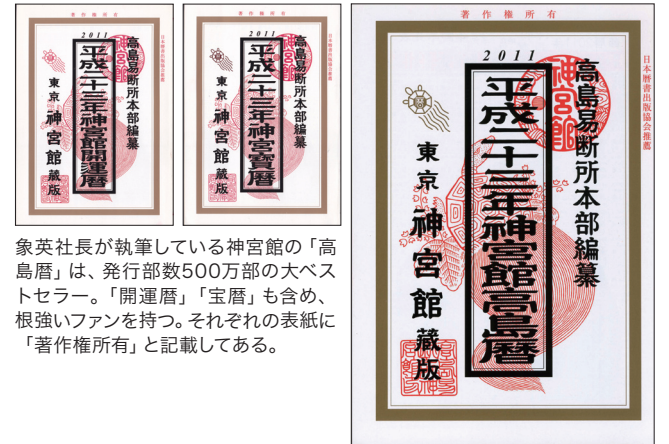
COMPANY DATA

所在地：東京都世田谷区等々力 1-30-2 電話番号：03-3703-5833

URL : <http://www.jade.dti.ne.jp/~kanyusha/>

設立：1981 年 6 月 資本金：1,000 万円

売上高：1 億円 従業員数：31 人（2011 年 6 月現在）



象英社長が執筆している神宮館の「高島暦」は、発行部数500万部の大ベストセラー。「開運暦」「宝暦」も含め、根強いファンを持つ。それぞれの表紙に「著作権所有」と記載してある。

もの”、“うちでしかできないもの”を作る大切さを痛感しました。高い授業料でしたが、この意識付けや方針は当社の大きな強みになったと思います」。

知的財産は文化を作り、
やがて文明を築いていくもの

以後、同社はこの教訓を生かし、着実に成長を続けている。たとえば象英社長は当初、暦だけを書いていた。それが自身の知識を生かして占いも手掛けるようになると、活動の場も利益も何十倍になった。象英社長は「さらに私のオリジナル色を加えることで、何十倍が何百倍にもなります。特色を出すことは知的財産を育てることにつながると確信しました」と話す。そして「優れた知財は将来文化になり、やがて文明の基になる重要な宝。暦という知財も2000年経っても今なお、残っていますものね」。

同社は、今後も自分たちならではの活動を展開し、将来“文化”そして“文明”になる知財を守り、育むことに尽力していく。

知的財産活用のポイント

著者と出版社がお互いの権利を確認し合い
ともに知財を守っていく

海外でも販売されている『神宮館高島暦』は、将来は、英語版などを出す構想もあるという。

出版社と象英社長の間では、出版社は同系の鑑定師を招聘しない、象英社長はほかの出版社に同系のものは書かないと

約束し、契約書にも盛り込んでいるという。象英社長は「こうしてお互いに知財を保証し合っています」と説明する。知財を安心して活用するには、こうした工夫も必要だろう。